

セッション	D. 言語行動・日本語教育 (2014.3.22 於 北京日本学研究中心)
タイトル	日本語母語話者のあいづち使用に関する一考察 －会話場面による相違について－
著者名(所属)	山本 花江 (恵泉女学園大学大学院修士課程)
連絡先 Eメール	<a href="mailto:k12cc005@keisen.ac.jp">k12cc005@keisen.ac.jp</a>

論文内容

(背景および研究目的)

私たちは会話を円滑に行うために対話者や対話場所に合わせて、無意識のうちに話す言葉を使い分けしている。それはあいづちも同じではないだろうか。しかし、これまで日本語母語話者の日本語におけるあいづち研究は進められてきているが、このような会話場面の点から述べられているものは少ない。

そこで本発表では、対話者が母語話者か学習者か、対話場所が日本か韓国かということにより、日本語母語話者のあいづち使用のどのような点が、どのように異なるのか明らかにすることを目的とする。

(検討方法等)

資料としては、日本語母語話者同士、日本語母語話者と日本在住韓国人学習者、日本語母語話者と韓国在住韓国人学習者の会話を各 2 例ずつ録音録画したものをを用い、母語話者同士の会話と相手は学習者の会話、また同じように相手が学習者の会話でも日本でのときと韓国でのときの会話を比較する。

(結果および考察)

その結果、相手が学習者の場合、母語話者同士のときよりも言語行動のあいづちの回数が増え、「うん」、「そう」などのあいづち詞の形式を多く用いること、「聞いているという信号」の機能のあいづち (例 1) を多く用いることがわかった。また、非言語行動においては、うなずき、笑いをを用いる回数が増え、うなずきでは「うなずきのみ」の形式 (例 2) と、「聞いているという信号」の機能をもつ言語行動のあいづちとともに用いる (例 3) ことが多くなる。そして、笑いでは聞き手のときの笑いが多くなり、(@笑い) の形式 (例 4) を多く用いると同時に、用いる形式も多様となることが明らかとなった。

対話場所の比較からは、言語行動のあいづちを打つ回数とあいづちの形式の面では韓国での会話の方に、あいづちの機能の面では日本での会話の方に、相手が学習者のときに見られる特徴が表れていた。非言語行動では、うなずきにおいては回数、用い方ともに韓国での会話の方に、笑いにおいては用いる形式、用い方ともに日本での会話の方に、相手が学習者のときに見られる特徴が表れていた。

(結論)

これらのことから、日本語母語話者は対話者、対話場所によってあいづちの用い方を変えており、話し言葉の場合と同様に会話場面に合わせてあいづちを使い分けしていることがわかった。

(例 1) (例 2○・例 3◎)

S: この中島美嘉一さんの

J: うんうん

S: 雪の華?

J: うんうんうん

(例 4)

S: ファンになっちゃったけど 普通に

J: (@笑い)

頭	
視線	_____
S	歩いているとー
視線	_____
頭	○
頭	◎
視線	_____
J	うん (あいづち詞、聞いているという信号)
視線	_____
頭	

参考文献

- ・ファン・サウクエン(2006)「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」『日本語教育の新たな文脈－学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性－』、アルク、pp.120-141
- ・郭末任 (2005)「談話場面における相づちの変化：日韓両言語の母語場面と接触場面を比較した場合」、『日本文日本文化学報／韓国日本文化学会』 26、pp.155-170
- ・倉田芳弥 (2006)「チャットの接触場面における談話管理：日本語母語話者と非母語話者の相づちの比較から」、『人間文化論叢』、お茶の水女子大学、pp.277-288